



発行所 名寄市徳田 204 番地 1
 北海道名寄高等学校同窓会
 事務局 TEL 01654-3-6842
 FAX 01654-3-6841
 発行人 会長 山崎博信 (名高4期)
 印刷所 (有)喜多印刷所

母校での「教鞭」

北海道名寄高等学校同窓会長 (名高四期) 山崎 博信



准公的な同窓会報を使つての私的感想はイカガカナものかの自責あり。

◎旧制北海道廳立名寄中学校一回生の石川義雄、同六回生の伊藤正男そして同十七回生の大野猛夫の大先輩のあとを受け、四代目の会長役をお受けしたのが、二〇〇七(平成一九)年十月十二日の総会でしたから、月日は流れて、はや四年を経過しました。

姓名判断ではありませんが、先輩の三方の姓名の結びは「雄・男・夫」であり、男の真骨頂・親御さんの期待と願いが紛々と漂つておりましたが。

◎私の高校時代の先生には名寄高校の前進、『北海道廳立名寄中学校』出身の先生方が複数、後輩の私には「面倒見の良いありがたい先輩」で「教え子は文句なしに可愛い」とのこと。

教員になつて何日目か。職員室の私の机の上に、文房具が置かれていました。

その中の「新品の鉄筆とガリ板」。生徒への連絡やテストを作る必需品。それをジッと見つめています。国語を教える戴いた旧名中三期生村上久一先生が「ヤマちゃん。原稿作りナ。原紙はキツテあげるから」と。

ガリ切りは、学生時代に見よう見真似でやっていましたが、お世辞にも上手く

いった体験はありませんでした。

恩師の作つて下さつた原紙。手刷りでしたが「ナントすばらしく美しいことか」。

村上先生は「小山隆先生のガリ切りは、モット綺麗に出来るんだよ」と。その小山先生は、旧名中二十期、一九四五年(昭和二十)年、現在の帯広畜産大学卒業。その年の八月十五日は第二次世界大戦終戦の日でありました。

◎一九七〇(昭和四十五)年当時の旧制中学から新制高校の教員は、「管理職に昇任か、本人の希望」でなければ転勤は無しの暗黙の了解があつたようである。「人事停滞の弊害あり」との北海道教育委員会の方針が、本人の希望が無にかかわらず、転動しなければならぬことになつてしまつたようでした。

「強制転勤」と呼ばれたその人事施策の最後の年、一九五六(昭和三十一年)年から十五年務めた母校から、隣街の土別商業高校へ転勤ということになりました。

母校で退職をと決めていましたのに、思いがけない転勤でありました。しかし、その四年後、一九七五(昭和五〇)年は名寄高校の工業科が名寄工業高校として独立、普通科はそのまま名寄高校として再発足し、現在の徳田区に引越す事になつていたようでした。

その時、私を名寄から土別への転出を促した、同じ高山秀丸校長が、名寄工業高校と学校名が変わつたものの、私が慣れ親しんだ、旧名寄高校の校舎で教鞭をとる手筈を整えて下さいまして、ご自身は札幌東高校へ転出されました。

私の人事は、三月二十四日の新聞発表には間に合わなかつたので、「いつ名寄

に戻つたの」と尋ねられたもの。

◎話は前後しますが、名寄高校定時制課程の誕生二年目。私が教員一年生だった時のクラブ活動は間もなく「郷土研究部」と改名するほど、生徒の郷土名寄の歴史への関心が育ち、その活動の成果は、八年後の一九六六(昭和四一)年度には名寄市第七回文化奨励賞を受賞するまでに育ち、地元は勿論、道北のオホーツク海岸、興部から雄武、そして淺茅野台地の遺跡調査が続けられたのですが、生徒減により、定時制課程は閉鎖になつてしまひ目下中休み。

◎私は二十五年の高校教員のあと、幼稚園園長・住職を続ける傍ら、主として准看護師養成所で今春七十七歳まで国語の講師として教鞭を執らせて戴きました。◎むすびにあたり、恩師・先輩と縁あつて青春を謳歌した同窓生各位の「不滅の名寄高校魂」に「応援歌ナンバーワン・・・」

「名高同窓会報」に寄せて

北海道名寄高等学校校長



千原 治

今春、本校第23代校長として赴任いたしました千原です。よろしくお願ひいたします。教員になつて33年目ですが、その間、約半分を道東、残りの約半分を札幌・小樽で過ごし、道北は初めての勤務です。

私は以前より名寄高校の勇名を耳にしています。学業、進学実績、部活動、学校祭等での名寄高校生徒の活躍ぶりに目を見張つたものです。高校の教員にとつて、生徒の活躍は誇らしいものです。そういう学校にしたい、そういう生徒を育てたいいつも考えています。そ

のための努力もします。私にとつて、名寄高校は目標となる学校の一つでした。今、その名高に勤務することの喜びを感じています。同時に、幾多の先人が営々と築いてこられた伝統と栄光をさらに発展させ、次の代に引き継ぐという使命を自覚し、身が引き締まる思いです。

着任して最初の始業式の校長講話で、私は学校の伝統と責任について、東京大学の学生歌を引き合いに出して述べました。次のような歌詞です。「ただ一つ旗影高し/今輝ける 深空の光/天龍を負える児達 友よ友/ここのなる丘に 東大の旗立てり/伝統の旗 東大の光/称え称えん 称え称えん」。私は生徒達に、「母校の伝統と崇高なる使命を高らかに歌い上げていくこの歌の大らかさと銜のない誇らしさが大好きである」と言いました。そして、「君達も名門名寄高校の生徒として、母校の伝統と歴史を誇りにして日々の高校生活を送つてもらいたい。当然、そこには責任がついてくる。その責任を一身に受けて立つていく名高生の姿に敬意を表する」と言いました。最後に付け加えて、「私も校長としてがんばります」と言いました。

現在の校舎は正門から校舎までがとて長く、校舎に向かつて左手は綺麗に手入れされた芝生や駐車場、右手は駐輪場です。この駐輪場に、名高祭の行灯作成のためのテントを12棟並べて建てます。今、ちようどその真最中です。実に壮観です。生徒達は名高祭名物の行灯を作りながら、名高生であることの喜びを感じているのではないのでしょうか。小学生の頃見た名高の行灯を今自分が作っている喜びにあふれているのではないかと思ひます。その誇りを胸に青春の炎を燃やしてもらいたいものです。そして、そのエネルギーは必ずや学習や部活動に反映されていくものと信じます。さらに、それは健全な社会人となるための豊かな土壌となつていくに違いありません。

同期会便り

名高第九期・同期会

あれこれ

旭川同期会庶務担当幹事

小野 道也

学友への、同期会案内発信事務、この三月着手。東日本大震災（地震・津波・原発危機）が発生。各地の学友も、大小の差はあるが罹災。世情混沌の時節柄、当該事務継続の可否が論議される、紆余曲折の経緯があった、今回の名高九期・旭川同期会。

この、6月23日〜24日。於 層雲峡観光ホテルで、恩師・鈴木整先生をはじめ、銅内外から学友六十数名が参集し開催となった。

同ホテル・8F29室を占有した、恩師を「かこむ」一隅・一夜。みんなの喜びの再会、感動はいつまでも心に残るものがあったようだ。

名高第九期の学友は、在住地域圏で大別すると、次の四地区になる。名寄・旭川・札幌・道外首都圏である。道内は3地区が順送り持ち回り当番制開催が定着化、今回に至る。

前々回は、平成18年6月。名寄当番で、於 グランドホテル藤花。

前回は、平成20年9月。札幌当番（古希の祝いを併催）で、支笏湖観光ホテル。首都圏は、原則毎年開催が慣例である。

さて、道内での同期会。昭和32年卒業後の開催回数は、幾度目なのか？記録を辿ると明確な資料が存在した。それは、前回の札幌同期会の「しおり」別冊として、編纂配付された、学友・鶴沢美男（以下敬称略）起筆による、記念誌「同期会50年の歩み」をひもとくことで、判明。

同誌では、卒業25周年。名寄開催が第一回目との記述がある。それまでは名寄周辺を基軸に、成田長利・岩本仁たちにより断続的な「つどい」は存在していた。したがって、以降組織的な隔年毎の同期会は、今回の旭川開催が第九回目となる。つまり、今回の名高第九期・第九回の同期会。巡り合わせの「妙」なのか。表現に筆者の品格が問われそうだが、俗言での連想は「ぞろ目」なのである。良好な結果招致の予感があったのは、不遜さわまりないかぎり、猛省しきりである。

波瀾万丈の世情動向。その方向性の論述はさておき、旭川同期会の開催速報記述が急務。名高第九期の動態は、在籍の学友が二九七名で、うち物故者五六名、転居先不明者一〇名。開催案内者二二三名、うち出席者六五名で開催確定。結果は良好で幹事一同安堵したのである。学友の高齢化向進などで参加願望横溢なるも断念やむなき学友多々。

以下に、今回の「しおり」の日程を記述する。

集合写真撮影。

榎山豊子代表幹事の総合司会で開会。

物故恩師・学友に痛惜哀悼のまことを捧げるため起立黙祷。

札幌在住・佐野義弘の名指揮で「校歌」

斉唱。



佐野義弘指揮 校歌斉唱

旭川在住・有馬弥史の代表幹事挨拶。恩師・旭川ご在住鈴木整先生のご挨拶。札幌在住・安斉隆の音頭で乾杯。懇親・歓談に入る。

名寄在住・成田長利の音頭でおひらきとなる。

以降、カラオケ・談話室・娯楽室（囲碁）など、任意分散。翌朝まで、愉しい時間を共有した。以上、時系列・平面的な記述に終始。学友の強固な「きずな」、あつき友情の発露確認など、どの期の諸氏もがご体験の感動場面につき、詳述省略。

名高第九期の学友は、男女とも、将来の在住者が幹事を受け持ち、卒業以後五番返答の太平洋戦争最末期の昭和20年に就学児童となった面々。戦時体験に差異はあるが、銃後の苦渋には、共通の背景

が存在する。しかし、人間の死生観。長じて後に、先人の曰くで知ることとなる。所謂、死線を共有した戦友との特異な情念の交錯体験。その実感は、知らない世代でもある。

小生、首都圏の同期会に数回参会。学友、及川俊、森川一保たちが主宰する会合の雰囲気感動・感銘して、帰途を辿るのが、都度のことである。

遠郷に在して、友との「きずな」を大切に。前述の戦友情念論と交錯するのである。学舎・名高の思考潮流が原点反映の所産との推論は、愚考ではないと確信している。

しかるが、ゆえに。彼らが、あたためあう共有感の発露。その「つどい」の一端を同窓会報に寄稿の提言。森川快語。さらに、遠隔地の名古屋在住の増井淑郎にも同様の提言、寄稿文受信。以上、三者連作文の登載により、小生のつたない一文完結は両学友碩学顕現のたまものである。深謝を表意して、擱筆する。

故郷遠くの同期会

名高九期卒 森川 一保

私達第九期卒業の同期会は、年により二度に亘って開催されます。というより二カ所で同期会を開きます。一方は母校のある名寄を中心に旭川・札幌と、三市の在住者が幹事を受け持ち、卒業以後五年毎に開催してきて、一九九七年の四〇周年の同期会からは、三年に一度と変更され、本年六月旭川が幹事担当で、「層雲

「峡」に於て開催されたのが今回の同期会であり、今年も卒業同期三百名中の六〇余名の参加を算えて、幹事団の微細に亘る心配りも有つて大盛會に終始しました。



「北海道名寄高等学校 第9期旭川地区同期会」於 層雲峡観光ホテル 平成23年6月23日

もう片方は、関東地区を中心に、毎年秋十月下旬に、前年の会合で決められた男女ペアの二名が幹事となり、各自の近隣地で開催する、初めは「同期の集い」とも言えた会です。

この会の始まりは名寄高校卒業から二十五年「四十而不惑」の歳を得ても尚、同期会の為に帰郷する事は至難だから、せめて近在の同期生が集まり思いきり語り合おうと、数人の発案で関東在住者に呼び掛け、「熱海温泉一泊案」に十四名の参加で発足しました。その会では尽きぬ話題に時を忘れて、夜を明かす仕儀となり、同様にして連続して三年連続熱海で開催する内に、「愉しいから毎年同時期に一泊で開催する」「幹事は自薦・他薦の一人、持ち回りで皆が必ず担当する」「場所は各幹事をご都合の良い場所で行う」等を決め、全くその通りに開催されて、欠ける年もなく、昨年十月には「草津温泉」に、二十八名を集めて第三十回を数えました。



「有朋自遠方来、不亦樂乎」友有り遠方より来たる、また愉しからずや！これが会の総てを現し、一年に一度旧交を暖めるに留まらず、今を語り未来を想う、最も多感な一時期を共有した同期の仲間だからこそ集いに、いつも他には代え難い活力を得て、明日に繋げてこられた同期会でした。

同期会出席の感想

名高九期卒名古屋在住 増井 淑郎

「光陰、矢の如し」

名高在籍から、六十年弱の年月が経過している。道内はもとより、本州側からも多数集い歓談の場が作られた事。幹事の皆様に感謝する。

人間の脳の奥深くに、青春時代の美しいものが記憶され、これを呼び戻し、

懐かしんだ。人間に与えられた特権かもしれない。理屈はともかくとして、再び健康で相集う機会が巡ってくる事を、期待しつつ筆を置く。以上。二〇一一年七月一日

卒業五十周年記念

「ふるさと名寄に集う」

十三期会会長 定木 孝市朗

卒業50周年記念の同期会「ふるさと名寄に集う」が平成23年6月25日にグランドホテル藤花で開催されました。地元の名寄開催は10年振り、当日は道内外より85名の同期の仲間が出席。また、恩師の札幌にお住まいの三田宏先生にもご出席をいただき、花を添えて下さいました。出席者一同は大変光栄と喜び、主催者と致しましても感謝をしているところでございます。

卒業してから現在までの同期会は

- ・ 20周年 名寄
- ・ 25周年 旭川
- ・ 30周年 名寄
- ・ 35周年 札幌
- ・ 40周年 名寄
- ・ 45周年 旭川
- ・ 50周年 名寄 (今回)

その他：東京、札幌、旭川で周年に關係なく開催されている。

当日は、約50名がバス2台に分乗し、12時30分ホテル前を出発。名寄駅前経由で市内観光に出掛けました。発車後間も

なく「なよろの水」が配られて事務局の配慮に一同感激。ガイド役はE組の湯川勇三君とF組の私が担当。

最初の目的地「ハッピーの像」が待つ、なよろ市立天文台「きたすばる」に案内致しました。私設の木原天文台をつくり、名寄市の天文教育の先駆けとなった、私達の恩師である故・木原秀雄先生の観測資料をはじめ、実際に触れることのできる隕石や旧プラネタリウム館の恒星投影機等の展示コーナー。本年春に公開された、北海道大学が設置した国内最大級の口径一・六mの望遠鏡。屋根がスライドする屋上観測室。最新のデジタルプラネタリウムによる特別バージョンの投影観賞等の館内見学。

そして「星守る犬」の奥津家のロケセット。車窓から「道立サンピラーパーク内施設」「なよろ健康の森」の案内の後。名寄高校校舎跡地（現名寄産業高校）前を経由して、8号通りを徳田地区へ向かい大型商業施設を車窓から見学。その変遷ぶりを実感していただきながら名寄高校に向かいました。

名寄高校では記念写真撮影後、同窓会館「白楊館」へ入館。それぞれの思いを胸に、母高の生い立ち、歴史を写真やパネルで見ている姿がとても印象的でありました。また、同窓会に維持協力を拠出するという事で「創立80周年の記念誌」十数冊が突然プレゼントされ、一同大喜びでありました。

次に向かったのは、「北国博物館」でした。北国博物館では、ロビーに展示されていた三宅章先生の「なつかしの建物水



場のホテルへ戻りました。

車中では、北海道の名寄市に行くのだから、日本中に静かなブームを巻き起こしている奇跡の感動作『星守る犬』の映画を見て、気合を入れて参加したという方が何人かおられ、案内役の私も感動を致しました。

旅の終わりとなった街「なよろ」には風連地区も含め、昨年の夏には350万本の「ひまわり」が訪れた観光客の目を楽ませたそうで、今年はそれ以上の400万本が目標と市が無料配布した観賞用ひまわりの種で、現在市民が家庭栽培で応援中。また、C組の懸尾隆一君が代表を務める、ひまわり工房で作られた名寄市のブランド品である、一番搾りのひまわり油「北の耀き」を同君の協力をいただき、特別価格で購入し、今回の出席者への記念品と致しました。

午後5時30分「ふるさと名寄に集う」の交流会が開幕致しました。最初に全員で記念写真の撮影から始まり、E組の宮本幸子さんの総会司会で開会。亡くなられた同期の仲間と東日本大震災の犠牲者に対しての黙祷・校歌斉唱と続き、主催者代表挨拶後、未だ張りのある、恩師の三田宏先生のお元気な声でのご挨拶に出席者一同大拍手。先生には感謝の記念品を贈らせていただきました。

その後、立方花柳喜美忠（C組山田久美子）さんによる歓迎の舞「うぐいす」の披露。そして、再会を祝しての乾杯の音頭は、地元経済界のリーダー役である名寄商工会議所会頭のE組木賀義晴君

をお願いして開宴。

卒業から50年が経ち、それぞれが色々な人生を歩んで来たにもかかわらず、同期の仲間という絆は今も引き継がれていることを互いに確認し合って「純粹で輝いていたあの青春時代」を再び思い起こし、何か：胸が熱くなり、感動の時が続き：気がついてみると閉会予定の8時になつておりました。

最後の締めは、神奈川県からご夫婦で出席いただいた、E組の小泉宏明君にお願いをし「次の再会までの健康を誓い合えい」無事閉会。その後は、全員で地下「グリューク」に移動しての二次会。終了予定時間の9時30分には、別れが惜しい、おしゃべり組は3階「松の間」へさらに移動。夜の探索親睦交流組は街へ繰り出している三次会へ。時の過ぎるのを忘れてしまふような絆の深さを感じたのは、私だけではないようです。

私達に残された時間は、そう長くはありません：名高13期という絆を大切にしたい、この楽しい集まりが、これからも続いていくことを心から願います。なお、今回の同期会の会計より、東日本大震災の被災者のために約3万円の余剰金について、日赤を通じ寄付をさせていただきます。

結びに、この度の名高卒業50周年記念の「ふるさと名寄に集う会」の開催準備に携わられた、事務局長D組の今田忠雄君他幹事一同・名簿の管理を続けていただいている、札幌在住のD組三浦秀一君に感謝：。

初めての同期会

第三十七期 米澤 和博

平成22年9月25日、名寄高校第37同期会を開催しました。平成21年の夏頃、東京在住の同級生より「俺達の代つて同期会やった？」の一言からすべては始まりました。名寄在住の有志にて実行委員会を立ち上げ、名簿作りからの作業でしたが、卒業して25年以上経過しているのだからかなり苦労しました。皆様の協力のもと名簿を作り上げ、9月25日に名寄市紅花会館にて開催できました。道内、道外



から32名の参加と中野先生、小上先生にもご参加いただきました。最初は落ち着かない空気がしましたが皆、会が進むにつれて高校生に戻っていききました。思い出話は次から次へと・・・



楽しい時間はあっという間で、気がつくとも分ですが朝の5時頃に5次会？終了で皆、家路にいったと思います。3年後に第2回の開催を決めて参加者全員の再会を誓い、26年前へのタイムスリップを解いたのでした。

私のせんせい

第二十二期 佐々木 三夫

私は1970年3月、名寄高校を卒業しました。3年生の担任は横井清史先生。口数の少ない、人情味のある先生でした。卒業式は、遊びに行った紋別の友人の家から戻るために乗った列車が雪で遅れ、出席出来ませんでした。就職のため東京へ夜汽車で一人旅立つ時、先生は名寄駅まで見送りに来てくれました。私の卒業証書と、当時としては珍しいバナナ数本を新聞紙に包んで渡してくれました。前途多難を予期するかのよう、深夜、岩見沢駅を過ぎた頃、猛吹雪で汽車が止まってしまいました。

車窓から見る暗闇の中で荒れ狂う白魔は、私に恐怖や大きな不安をもたらしました。空腹のため、先生からいただいたバナナを食べると、なぜかしら涙があふれ出て止まらず、先生の顔が頭に浮かびました。

親と同じく、恩師にも感謝の言葉を直接口にするのは恥ずかしいものです。駅まで見送りに来てくれた先生を思い出すたび、温かい気持ちになります。

この文章は、平成23年3月21日付けの北海道新聞に掲載されたものです。同窓生と先生の素敵なお話でしたので、紹介させていただきます。

同窓生 活躍状況

今回は、新聞で報道された同窓生の記事を紹介し、同窓生の活躍状況を報告させていただきます。と思います。

絵詩書カレンダー作製

将来は福祉施設利用者作品で

名高四十期 小林 裕幸

美深町生まれで現在、南富良野町内の幾寅郵便局長の小林裕幸さん(40)は、毛筆で詩とそれを印象付ける絵を描いた「絵詩書」の日めくりカレンダーを作製して販売。作製作業は南富良野町内の福祉施設で行われ、その販売利益を寄付。「福祉施設の利用者たちが元気になって、今度はみんなの作品を世に出すことができれば」と期待を込めながら話す。

小林さんは名寄高校卒業後、郵便局員に。名寄駅前、風連郵便局などを経て、昨年4月から賃貸郵便局長を務めている。絵詩書は、利用客たちに喜んでもらえる郵便局の窓口、空間づくりを」と昨年9月から「小林白炎」の雅号で制作に取り組んでおり、幾寅郵便局内や南富良野町内の道の駅で常時、作品を展示。また、同町内の小学校や高校からの依頼を受け、卒業生の似顔絵も描いている。

日めくりカレンダーは、7月1日に1部600円で発売し、これまでに700部ほどを販売。また、7月10日に開かれた「美深のぞみ学園祭」会場にも出向いた。現在、名寄市内では森実商店、名寄と美深、音威子府、中川の道の駅で販売している。

カレンダーは1日から31日までの日付のみで、日ごとに絵詩書が描かれており、その中で「山びこありがとう大きな声でありがとう ありがとう ほらっあなたにも」の詩とともに山と太陽、子供たちの絵。

さらに別の日付で「小さな小さなこのぼくも 大きな大きな気持ち伝えるよ」の詩と郵便配達員の姿が毛筆で描かれている。小林さんは「現代は心が病んでいる人が多く、自分に言い聞かせるような元気になっていただければ」と絵詩書に込めた思いを語る。

カレンダー印刷、製本などの作製作業は南富良野町内の知的障害者授産施設「南富良野こさくら園」利用者が手掛けている。小林さんはその販売利益を寄付している。

10月15日には第2弾カレンダーを発売する予定で「みんなで協力し合って個性を開きながら、利用者たちに夢を与えていきたい」と話し、自身の新たな作品づくりに意欲を燃やすとともに、将来は授産施設利用者の描いた絵でカレンダーができることを願っている。



利用者たちと語る幾寅郵便局長の小林さん

平成22年9月14日 名寄新聞より

本場の踊りを披露

「トークとフラの夕べ」で

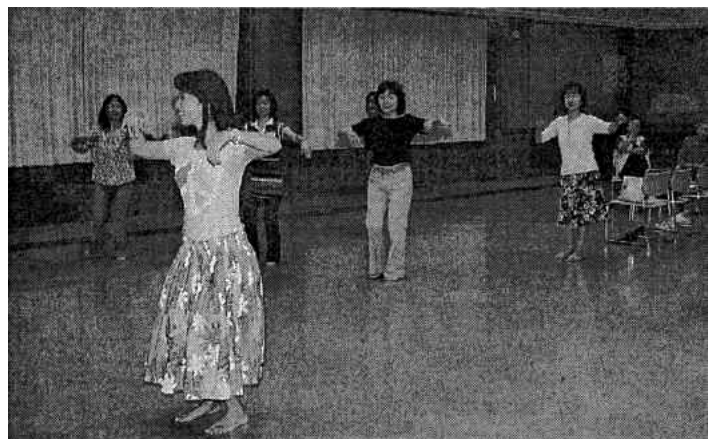
名高四十期 荒川 錬子

美深町教育委員会主催の生涯学習推進講座「トークとフラの夕べ」が、9月10日午後6時から町文化会館で開かれ、美深出身で現在はハワイに住んでいるフリーアナウンサー、荒川れん子さんが本場のフラダンスを披露した。

荒川さんは名寄高校卒業まで美深に住み、昭和女子大学卒業後、富山テレビ、テレビ北海道(TVH)のアナウンサーを経て、東京を拠点にフリーアナウンサーとして活動。平成19年、フラダンスの発祥地といわれるハワイ・モロカイ島に移住。同島のフラ教室でトップダンサーグループに所属、唯一の日本人ダンサーとして活躍。最近はライターとしてハワイの情報現地から発信している。

講座には女性を中心に25人が参加。荒川さんはテレビ、ラジオで幅広く活動するためフリーアナウンサーとなったことを話すとともに「フラダンスは子供からお年寄りまで楽しむことができる。動きはゆったりしているように見えるが、実際は体力を消費する有酸素運動。ハワイはもともと文字がなく、神話や伝統をフラダンスで伝えた。踊り手は話を伝える主人公となるので、日常生活から離れた気分を味わうこともできる」とフラダンスの魅力を紹介した。

その後、参加者とともに本場のフラダンスを実践。フラダンスは数種類の基本



フラダンスの魅力を伝える荒川さん

ステップを組み合わせて踊るもので、体重移動や腰の回し方、手の動かし方などを指導。「動き自体に意味があるので感情を込めて踊って」などと呼び掛け、参加者はハワイ音楽に合わせて踊りを楽しんだ。

平成22年9月24日 名寄新聞より



平成二十二年 名高同窓会総会・懇親会実施される

総会・懇親会盛会に終了

平成二十二年名寄高校同窓会総会・懇親会が去る平成二十二年十月八日（金）に例年通りグランドホテル藤花において約百十名の参加を得て行われました。

総会では、山崎博信同窓会長、武者前校長が挨拶し、藤原前教育長にご祝辞をいただいたから議事に移りました。二十一年度の各報告、二十二年度の計画等、全ての議案が承認され、無事に総会を終了いたしました。

懇親会後の懇親会は、当番幹事である名高26期、36期、46期の方々のご尽力で盛会に行われました。協賛いただきました各商社様には、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



ご祝辞をいただいた藤原前教育長

挨拶をする武者前校長

挨拶をする山崎同窓会長

平成22年度同窓会総会

丸山事務局長と山崎同窓会長



毎年総会を見守る応援団旗



次期当番幹事を紹介する猿谷幹事長



受付の様子



毎年出席されている名高女の皆さん

平成22年度 協賛商社一覧 敬称略順不同

- | | |
|-------------|----------|
| (株)大野組 | 柴田時計店 |
| (株)東洋肉店 | 松前陶器店 |
| (株)北方印刷所 | 新光電気 |
| (有)喜多印刷所 | 森実商店 |
| (有)東洋製麺 | 須磨スポーツ |
| (株)坂下組 | 清水金物店 |
| アキ写真店 | 青野海産物店 |
| いろは肉店 | 石田商店 |
| かまくん本舗 | 倉沢組 |
| カメラの写楽 | 村西運輸 |
| グランドホテル藤花 | 池田薬局 |
| サバト家具店 | 辻薬局 |
| スタジオ稲場 | 定木税理士事務所 |
| ダスキン滝沢 | 湯川名文堂 |
| ばらドライクリーニング | 梅村商店 |
| フタバおもちゃ | 梅野博・新事務所 |
| ベスト電器駅前店 | 北海道電力 |
| 喜信堂 | 北昭産業 |
| 吉川印刷 | 北星信用金庫 |
| 喫茶 ブラジル | 鳴海商店 |
| 宮崎・靴スポーツ | 木賀商店 |
| 黒川商店 | 鈴木写真館 |
| 志水商店 | |

懇親会での「U」



懇親会司会の今井さん



乾杯のご発声をする大畠札幌支部長



万歳のご発声をする名取先生



当番幹事を代表し挨拶をする伊藤さん



抽選会でのジャンケン



さわやかな若い波

人との繋がりが

吉岡 竜志

(名高六十一期)



私は、平成18年4月に名高に入学し、平成21年3月に卒業しました。現在は名寄市内で働いています。

私は、名高生活で様々な思い出があります。なかでも、名高祭が一番思い出に残っています。とても短い準備期間でしたが、みんなと必死になって汗を流して準備をし、つらい時もあつたけど、みんなとひとつの物事をやり遂げるといふ喜びを感じることができたし、当日みんなではしゃいだことは、忘れられない思い出になっています。

しかし、名高生活の中で思い出だけでなく、大切なことを学びました。それは、人との繋がりの大切さです。名高祭を笑って終わったのは、仲間とつらい時も支えあつて最後までやり遂げられたから。部活動で先輩が引退し、キャプテンを任せられ、自分が引退までその仕事をやり遂げられたのも、自分の一人の力ではなく、同じ部活の仲間の支えがあつたから。こうして今就職できたのも、仲間の支え、そして先生方の支えがあつたからだと思つています。名高に入って、人との繋がりの分だけ自分が成長できたのだと思つています。

私が名高に入学したとき、新しい環境に馴染めるか不安でしたが、たくさんの人との繋がりがあつたから、不思議と不安はすぐになくなつていきました。

今働いている職場に就職したとき同じ不安はありました。もちろん周りは年上の方しかいないので、気軽に話しかけづらいし、最初は何をしたいかわからないうし、右も左もわからない状態でした。しかし、気軽に話しかけてくれて、優しく仕事を教えてくれる先輩・上司のおかげで、今では気軽に仕事のことを聞ける世間話や冗談を言つたり、職場に馴染

めている自分があります。けどまだまだ未熟なので、職場の人に仕事のことや仕事以外のことでいろいろ迷惑かけたりしていますが、間違つたことは注意してくれる先輩・上司がいるから自分は成長できているのだと思つています。間違つたことを注意されるのは当たり前だと思つけど、その当たり前が自分にとっての成長に繋がっているので日々先輩・上司には感謝しています。

これからも出会つていく人との繋がりを大切にし、そして、日々成長していく自分が、先輩や上司に支えられ、教えられたことをこれから入社してくる後輩たちに伝えられるよう努力していきたいと思つています。

同窓会報第45号の原稿募集

平成24年7月25日発行予定の同窓会報45号の原稿と広告を募集しています。会報の掲載内容は、同窓会各員や各支部地区役員、同窓生個人の原稿、旧職員、原稿、支部だより、同期会だより、同窓生の活躍状況などがあります。寄稿先は事務局(TEL 01654-316841 名寄高校 伴井)までご連絡下さい。原稿用紙等をお送りいたします。(原稿は各自のパソコンで作られたものでかまいません)写真は使用後に返却いたします。

今後も、同期会だよりや同窓生の活躍状況などを積極的に掲載させていただきます。と考えていますので、ご協力よろしくお願ひいたします。

平成23年度及び24年度総会日程

今年度(平成23年度)の本部総会・懇親会は、平成23年10月14日(金)18時30分からグランドホテル藤花で開催されます。当番幹事は、名高27期、37期、47期と名高定23期の方々です。

また、来年度(平成24年度)は、名高28期、38期、48期と名高定24期の方々による当番幹事で、平成24年10月12日(金)18時30分からグランドホテル藤花で例年通り開催される予定です。

編集後記

本年度より、本部事務局長が丸山(名高30期)から伴井(名高28期)に替わり、同窓会報も初めて作製し、上手に作るものが出来ませんでした。しかし、原稿を提供いただきました皆様の御陰をもちまして第44号をなんとか発行できました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

今年3月には長年名高同窓会事務局を担当していた、だいた養護教諭の三木佳子先生(名高21期)がご退職されました。本校には、現産業高校の場所から現在の徳田の地に移転と同時に赴任され、三十年以上も勤務されました。名実共に名高の顔であり、AKBではありませんが同窓生にとり「いつでも会える母高の先生」が退職されたことは、本当に残念です。現在も名寄市に住み、今後は同窓生の一員として同窓会を支えていただけたらと願っています。

なお、今年度からは名高36期の島影論先生が赴任され、同窓生としては3名の職員が勤務しています。



平成二十年名高祭 3A